

パウダー求めて大遠征

湯殿山／姥ヶ岳 (2024/2/3-4)

土日に休みが取れたのでT野さんの企画する山スキーに参加させてもらうことになった。ただし雪不足の昨今、行先は直前の状況を見て決めるということでいわゆるミステリーツアーである。

天気予報が確定してきた頃、T野さんから「雪は少ないけれど割りと近い乗鞍か、遠いけれどパウダーが期待できる月山か」という二択のメールが送られた。『遠いけれど』とは言うものの月山は遠すぎる。その遠さに僕が躊躇している間に次々とパウダーに票が集まり、行先は月山に決まった。

しかしそうなるとうる僕には不安があった。超長距離であると共に、ナビを修理に出しているためダッシュボードにはぼっかりと穴ぼこが開いているのだ。要するにナビもカーステレオもラジオも無い状況。

それで運転交代とグーグルマップでのナビ係として僕の車にはK井さんとS香さんが同乗することになった。若い二人のおかげで僕の車の平均年齢はT野車の平均年齢よりなんと14歳も下である。

金曜夜、時間通り新宿駅に集合しT野車に出発の連絡を入れると、向こうではトラブル発生、Y科さんが集合場所を間違えて30分遅れるという。ではこちらは焦らずに運転して行こう。ナビも音楽も無い環境ではあったけれど今夜の宿泊先である米沢までストレス無く移動することができた。

5:30起床で出発する。米沢まで来たけれど月山はさらに先である。高速に乗って山形の奥深くへと進んで行く。

雪国のはずが移動中の景色にはほとんど雪が無い。路面に雪が出て来たのはそれこそ国道を折れ月山に向かう坂の途中から。標高が上がると雪がちらついてきた。

除雪終了点まで行くと車が15台くらい止められており縦列で駐車した。

雪除けのフードを被って8:30、湯殿山へ向かうトレースを歩き始める。先頭は当然のようにI崎さんである。石跳川沿いの平坦な道。有名な標識の前で写真を撮るが例年に比べて2mくらい雪が少ないようだ。自然博物館を越えて行く。いつもなら対岸へ渡るポイントとなる場所は沢割れしていてさらに上流へとトレースは伸びていた。



沢を渡った所でトレースは二手に分かれ我々は右へ進んだ。トレースの先にはガイドツアーらしき集団があった。

樹林帯の中を進んでいるため特に風は感じなかったが、てんくらはCで向かいの尾根に木々が揺れているのが見えた。

「森林限界超えちゃうと風が強いからさあ、1,250mくらいまででいいんじゃないか」とI崎さん。

ほどなく上からスノーシューの3人組が下りて来た。

「上まで行こうとしたけどこの上からは風が強くて真っ白なんで引き返してきた」と言っていた。

ちょうど 1,250m くらいの所でガイドツアーの連中も滑る支度をしていて、横を通る時、

「トレースをありがとうございました」と I 崎さんが礼を言った。

彼らは石跳川に向かう斜面を滑るようだ。それに対して我々は反対側、ブス沼に向かって滑ることにする。

T 野さんがパウダースノーを滑る際のコツを説明し、そして滑り出した。

「ホッ、ホッ、ホッ、…」

バージンスノーに 1 本のトレースを付けて行く。もう待ってられず次々に滑り出す。まさにパウダー！！ ターンの度に浮遊感がたまらない。ここまで来た甲斐があった。手つかずの斜面は広くて 7 人でも狭苦しさを感じない。

快適な斜面に A ねーさんも「フー、フー、フー、…」なんて声を発して滑っている。

「あれだね、気持ちいい斜面だと A 原さんが声を出すねえ。逆に A 原さんが声を出すという斜面ってことだな」と T 野さんが指摘する。

斜面が緩やかになった所で上り返すのかと思ったら T 野さんはさらに下に向かいほとんど平らな所まで下りた。そこがブス沼。一挙に 200m くらい滑った。

「さっきの所まで上り返そうか。」

東に進路を取って往路のトレースにぶつかりそこからまた上りだした。滑り出しの所まで戻りトレースの脇を滑って行こうと考えていたのだが、正にそこをツアーの連中が滑り出していたので先ほどの滑走面との間くらいの辺りを滑ることにした。

「それじゃあ行くよ」と T 野さんが先頭で滑り出す。

「ホッ、ホッ、ホッ、…」

くによくよと気持ちよさそうに落ちて行きあつと言う間に見えなくなってしまう。しかし斜面にシュプールは一本きりなので後を間違えることは無い。

下って行くと沢を渡って二つに分かれていたトレースの左側の方へ出た。石跳川を渡り後はトレースを辿って戻る。



自然博物館の近くまで来ると傾斜がほとんど無くなり手漕ぎをしなければならなくなる。すぐ後ろに A ねーさんが「ほらほらほらー」と追い上げて来た。虎に追いかけられたカモシカのごとく必死で逃げ延びようとしたが渾身の手漕ぎも空しく力尽きた。

13 時、車に戻る。パウダー満喫、たいへん満足でありました。

ここから宿を取った大井沢へと向かう。国道までの坂を下るが路面の雪にタイヤが滑らないようセカンドでゆっくり下りる必要があった。大井沢の温泉に着くと車から降りてきた T 野さんが「二駆だと結構滑ったよ」と言っていた。

温泉に入ってから宿に向かい、夕飯は早い時間の 18 時からでお願いした。しかしそれまで他にすることは無く、15 時から飲み始めた。

「あのお、これえ」遅刻のお詫びにと Y 科さんが日本酒とワインを差し出した。

「それどこで買ったの？まさか間違えて行っちゃった駅でじゃないよね」とあの人は容赦無かったが、Y 科さんははにかんだ好々爺の顔で受けていた。

18時になり一階の食堂へ下りる。夕食は『月山そば』だった。鍋にはしょっぱいつけ汁に山菜がこれでもかとばかりに投入されている。つけ汁をお椀に取り蕎麦を浸して口に運ぶ。美味い！！この宿は食堂もやっているのだから本格的な『月山そば』を出してくれるのだ。さらにほっかむりをして満面ニコニコ笑顔のおばあちゃんが皿に盛った山菜を何皿も出してくれた。この山菜づくし。いいなあ、東北はいいなあ。

部屋に戻ってもうちょっと飲もう。I崎さんが残っていた山菜を皿ごと持ってきた。「ちょっとちょっと、それ本当に食べるの？食べないんだったら持ってきちゃダメでしょ。」

「えっ」と答えたI崎さんの目は既に細い。ほどなく壁や床にもたれる者が増えてきた。長距離移動の疲れもあるが、なにせ15時から飲んでいるのだ。20時には消灯し各自シュラフに潜り込んだ。



今朝も5:30起床。たっぷり9時間半の睡眠が取れた。各自朝食を食べ出発の準備を整え表に出ると山菜のおばあちゃんが見送りに出て来てくれた。ところがほっかむりを取ったおばあちゃんはおばあちゃんではなく、僕らと同じ歳くらいのおばちゃんであった。ほっかむりと腰の低い満面の笑顔に変な先入観を働かせてしまったのだ。いやあ、失礼しました。

車を走らせ除雪終了点に着くと昨日よりも駐車している台数がだいぶ増えている。さすがにここは人気あるなあ。団体さんも多いようだ。

7:40出発。時計を高度計に切り替えようとしたが切り替わらない。「あれっ?!」と思ってよく見たらちょうど高度が740mで時計と同じ表示をしていたのだった。

今日もI崎さんが先頭を歩き出す。前を歩くパーティーが例の標識の所で写真を撮っていたので昨日撮ったにもかかわらず今日も集合写真を撮ることにした。お約束の場所なのだから。

昨日のルートを進んで行く。前には二つの団体があったが、沢を渡った先で一方は右、もう一方は左のトレースへと分かれて行った。それに対して姥ヶ岳へ向かう我々はさらに右へ進路を取った。こちらはノートレースである。

「あれだけ人が居たけどみんな湯殿山だな。」

谷あい一本取った。一瞬陽が射し向かいの斜面に大きなブナの木影が映し出された。こういうの美しいなあ。

I崎さんがスマホでルートを調べていると

「あのボコッとした所を巻いて行くんじゃないかな。先行こうか。」

先頭がT野さんに代わり歩き始めた。標高が上がるにつれて角度のあるキックターンも必要になり、隊列が少し広がった。

途中でK井さんが先頭を代わり、さらに僕に代わった。今日も尾根筋の風は強いようだ。いったいどこまで上がって行くんだろう。

1,350m付近まで上がった所で滑り出すことにした。南に向かって滑って行くが今日も手つかずの雪面をいただくことができた。気持ちのよいふかふか斜面の贅沢。ああ、たまらない。

350m 下った所で集合。

「10:40 だけはどうする？ 帰りが長いからこのまま帰ってもいいけど、もう一本行こうか。」

そしてT野さんが「あそこを上ろう」と指したのは雪の壁のように見える斜面だ。上れるのかなと思ったが

「あっちに向かって行けばいいでしょ」とAねーさんが先頭を買って出た。

しかし5分も経たず交代。結構な斜面なのだ。では二番手が代わります。斜めに進んではキックターンを繰り返す。後続を考えるとこんなルート取りでいいのだろうかと自問しながら進んだ。

一本取って再びT野さんに先頭を代わる。いよいよ上がり切った所で

「姥沢のリフトが見えるよ」と声上がる。正面下方にうっすらとリフトが見えた。位置関係がはっきり分かるランドマークだ。

「春だとあそこから始まるんだよな。」

最後の一休みを終えて帰路に向かう。方向は右の尾根筋。そこまではよかったが、最後に切れ落ちる斜面が厳しかった。位置確認をしてトレースに戻った。

だいぶ人が通っているため下りトレースの手漕ぎは昨日より進みやすかった。今日は追い立てられないようにAねーさんの後ろに付いた。もちろんカモシカは虎を追い立てるようなことはしない。

12:40、除雪点まで戻ると救急車が停まっておりレスキューの人が何人も控えていた。救助要請の連絡が入ったようだ。

「大ごとにならなきゃいいんですけどね」と隣に駐車していた人が呟いた。

取り敢えず僕らは全員ケガも無く笑顔のグータッチであった。

道の駅にしかわで温泉に入り帰路につく。帰路の距離はとんでもなく長いけれど今回の満足と引き換えだと思っただらなんくるないさあ。

覚悟して高速を走るが、翌週の三連休を控えているせいか、東北道はそれほどの渋滞にならず想定内の時間には帰ることができた。総行程は900kmにも及んだが大満足のツアーであった。それにしてもこれからは休みの日程を気にせずこの仲間たちと一緒に山に行けると思うとなんて楽しみなことだろう。



(H口 記)